

(様式 2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書 (参加学生)

平成 24 年 12 月 4 日

所属：教育文化学部 国際言語文化課程 国際コミュニケーション選修 学年 2 年

氏名：三浦奈月

研修先大学・機関名等 (国)： ケニヤッタ大学、マトマイニチルドレンズホームなど
(ケニア)

在籍身分：

渡航年月日： 平成 24 年 9 月 1 日

帰国年月日： 平成 24 年 9 月 22 日

○研修先での学習内容等

3 週間の研修では、大きく分けて 3 つの活動を行いました。最初の 1 週間は、ケニアの NGO として日本人の菊本照子さんという方が活動されているマトマイニ・チルドレンズ・ホームという孤児院に滞在しました。ここでは孤児院の子供たちとの交流、菊本さんが行っているスラムのシングルマザーへの自立援助活動や日本野菜収穫のお手伝い、またケニアで 2 番目に大きいとされるマザレスラムと JICA 事務所への訪問を行いました。また週末にはケニアで最大の国立公園マサイマラでのサファリで、たくさんの野生動物を目の前で見るといっても贅沢な体験をしました。2 週間目はケニア北部のナニユキという村へ行き、ここに住む日本人の水谷文美さんという方と一緒に農村の人たちと関わる活動をしました。森林伐採による水不足などの問題を抱えている農村の人々に、日本や秋田の農業をプレゼンしたり、この地の将来を担う子供たちに向けて読んでもらおうと森林の大切さを伝えるために手書きのブックレットを作成したりしました。また、ケニア山へ登山もしました。3 週間目はケニヤッタ大学で日本・秋田・秋田大学についてプレゼンをするとともに、日本文化を体験してもらう JAPAN フェアを行いました。当日は 100 人以上の太巻きやお好み焼きを作ったり、浴衣の着付けや習字などの体験コーナーを設置したりして、ケニヤッタの学生が楽しそうにしていたのがとても嬉しかったです。先生や学生に協力してもらいながら、準備を頑張った甲斐もあり満足のいくフェアを開催することができたと思います。

○研修期間の生活面について

ケニアは本当に貧富の差が激しい国です。これについてこの 3 週間では本当に実感しました。私たちは最初のマトマイニから最後のケニヤッタ大学という流れの中でケニアの貧困層から富裕層までの生活の違いを目の当たりにしました。貧困層にある孤児院では食事はケニアの主食であるウガリと少しの野菜か、米と豆のどちらかでした。トイレの水はバケツに水を汲んで

(様式2)

流し、バケツに半分のお湯を使ってお風呂とします。私たちは沸かしてくれたお湯を使わせていただきましたが、普段子供たちは冷たい水を使っていると聞きました。テレビはもちろんありません。人が生きていくことのできる最小限の物や環境だけで生活しているという印象を受けました。しかし、ナニユキへ行くと水洗トイレに温水シャワーが使えるホテルに泊まり、食事バイキングスタイルでケニアらしいウガリなどはほとんど口にしませんでした。ケニヤッタ大学へ行くとテレビもあります。日本のホテルと比べてしまうと、温水シャワーと言っているのに水しか出ないとか、水洗トイレが流れないとか、適当な部分もありましたが、マトマイニの生活やスラムを見たあとでナニユキやケニヤッタ大学の生活を見ると、ここは本当に同じ国なのかと疑うほどです。また、水道水が飲めないためにペットボトルのミネラルウォーターを買うことは必須でした。日本できれいな水が飲めることがどんなに貴重で贅沢なことかわかります。きれいに舗装されて交通整備が整っている道路や、衛生的にとっても清潔な街並み、温かいお風呂やきれいなトイレ、美味しいご飯など帰国してから改めて日本の良さというものにも気づきました。

○研修期間全般にわたる感想

3週間を終えて、とにかくいろいろなものを見ることができたと思います。そのすべてが私の人生において初めてのことばかりだったし、すべてが驚きと感動、そして複雑なものでした。アフリカの広大な大地や、人の優しさには感動した一方で、貧しい人々の生の暮らしぶりや極端に差のある貧富の格差を目の当たりにして複雑な思いでいっぱいでした。特にスラムを訪問したことは本当に大きい経験です。私はスラムが貧困の象徴であり、スラムは無くなるべき場所だと思い込んでいました。訪問する前の私には、スラムは暗くて不衛生で、人々の表情には生きる希望もないようなそんな暗いイメージしかありませんでした。しかし実際に足を踏み入れ、この目でスラムを見るとそんなイメージがただ間違いであるということを感じ知らされず。スラムの人はみんな素敵な笑顔で私たちを歓迎してくれました。子供たちの元気でキラキラした笑顔にこっちまで笑顔になります。スラムの中では髪を切っている人、野菜を売っている人、洗濯をしている人など、そこにはごく普通の生活が広がっていました。確かに環境はとても不衛生です。上下水道が整っていないために汚物はそこら中に捨ててあり異臭が広がります。電気やガスもありません。でも、ここに住む人は毎日を一生懸命楽しく生きていました。またスラム出身の青年たちによってよりよいスラムを目指した活動も行われていました。菊本さんは「この人たちを可哀想と思わないでほしい。スラムはあってもよい場所」とおっしゃっていました。その言葉の意味は実際にスラムへ行かなければわからなかったと思います。ただスラムが無くなることで貧困が無くなるわけではありません。スラム全体の質が上がれば、スラムは貧しい人にとって住みやすい場所になっていくのではないかと思います。孤児院に関しても、あの子たちは可哀想ではない、あんなに素敵な笑顔で毎日を頑張っていると思うと今までの“貧困”に対する考え方が変わりました。私たちが考える“貧しい暮らし”とは何を基準にしているのでしょうか。少なくとも日本人である私たちは、自分たちの日本の暮らしを無意識に基準にしてしまっているのではないかと思います。電気もガスも水道もあるのは当たり前

(様式 2)

前、科学が発展し近代的な生活が普通になっている日本人にとっては、毎日1ドル以下で生活しているような人々を貧しいと思ってしまうのです。でも、貧しいとか可哀想とか、それは私たちではなく彼らが決めることなのだというのが、この研修ではよくわかりました。生まれた時からこのケニアの環境が普通の彼らにとって、この生活が貧しいかどうかなどは考える必要もないのです。このような考え方は、援助活動の難しさにも深く関わってくると思います。JICA 訪問の際に、政府開発援助ではスラムやストリートなど本当に援助が必要な貧困層の人々については何もできないということを知り、ショックを受けました。ケニア政府や富裕層の人々は貧しいスラムやストリートの人々を同じ人間だと思っていないと聞きました。スラムという場所は地図には示されないそうです。これがケニアの最大の問題だと思います。広がる大きな格差と、それについて無関心な人々。これではいくらナイロビが発展したとしても国全体の発展は一生無理でしょう。貧しい人々を助けたい、そんな思いでたくさんの活動がされています。しかし、支えられる国そのものが変わらなければ意味はありません。また私たちが勝手に“貧しい”と考えるその価値観が現地の人と必ずしも同じとは限りません。現地の人が必要なのは何かを考える必要があります。援助というものがどれだけ大変で複雑なものなのかを実感しました。もちろん何かしてあげたいという気持ちは大事ですが、それだけでは出来ないこともあります。一番良いのは、ケニアの人が行動を起こすことです。スラムの青年団のように、その問題を自ら経験したことのある人たちによって活動し、ボランティアや先進国はその手伝いをするというのが理想の形である、と今の私は考えます。支援の問題は私が想像していたよりはるかに難しく、正しい答えを見つけ出すのも大変です。だから発展には時間がかかりますが、ちょっとずつでもスラムやストリートや生活が貧しい人たちが少しでもよい環境を得ることができるようになればいいと思います。

そもそも、国際協力という活動について以前から関心があり、アフリカ＝貧困というイメージから、孤児院を訪問したり現地の人々の暮らしぶりを直接見ることができると今回の研修で何か自分の中でよい刺激になるのではないかという思いから、今回の研修に参加しました。しかし、実際にケニアへ行って学んだことはとても多く、また非常に難しいものでした。実際に見れば何かわかるかもしれない、というよりはむしろ、さらにわからなくなったというのが正直な感想です。貧困の中にも幸せは溢れています。目に見える貧困以外にも政府や国自体にも問題は山積みです。援助というものがどれだけ難しいのかということも学びました。本当に貧しい人々を支えたいと思うなら、その決意や覚悟は相当なものが必要だし、何年もかけて考えていかなければいけない問題があると思いました。日本にいたら決して感じることをできないことが多く、ショックを受けることもありました。しかしマトマイニやスラムの人の素敵な笑顔を見て、本当の幸せとは何なのか感じました。とにかく、私がケニアで体験したすべてのことに素晴らしい価値がありました。ケニアへ行きたくさんのことを学ぶことができ本当に幸せだと思います。この経験を私は絶対に忘れないし、無駄にたくありません。ケニアへ行くにあたってお世話になった全ての人に感謝します。また、ケニアで出会った全ての人がこれからもずっと素敵な笑顔でいてほしいと心から願います。

(様式2)

○今後の勉強計画

自分にとって初めての海外でしたが、やはり英語でのコミュニケーションは難しく、現地の人と言っていることが理解できないことがしばしばありました。自分が言いたいこともなかなか言葉が出てこなくて伝えることができないということもありました。今後も英語の勉強、特にリスニングと語彙力について努力していかなければいけないと思います。また、さらに関心が深まった貧困問題について文献を読み調べ、知識を深めたいと思います。ケニアで見て学んだことやこれから増やす知識を何らかの形で将来に繋げることが目標です。